

古き時代を想い出して

辻 信太郎

(昭和二十年卒)



辻 信太郎(つじ・しんたろう)
昭和2年甲府市生まれ。甲府中学(現・甲府一高)を経て桐生工業専門学校(現・群馬大学工学部)卒業。昭和24年、山梨県庁に入庁。昭和35年に山梨県庁を退職し、株式会社サンリオを設立(代表取締役社長(現任))。平成2年、東京都多摩市に「サンリオピューロランド」、大分県に「ハーモニーランド」のテーマパークをオープンさせる。

想い返してみると、私が甲府中学(現・甲府一高)に在学していたのは、今から七十年近く昔のことになります。

私が生まれた一九二七年当時の山梨県は、日本四十六都道府県中で最下位と言われるほどの貧乏県でした。山梨県は郡内と国中で分かれており、郡内地方は富士山の溶岩地質、国中地方は四方を山に囲まれ、その山間から流れ出る笛吹川、釜無川など多くの川が運んでくる土砂によって川底が上ががり、川が道路よりも高いところを流れる天井川と呼ばれる地形で、南の地区は大雨のたびに氾濫を起こしていました。どちらにしても地形的に恵まれない土地であったため、山梨県は貧乏県であることを認めざるを得ませんでした。

そのため、何とか、その貧しさから脱却しようと思んだ者には、二通りの道がありました。

一つは、一獲千金を求めて、博徒となった者たちで、黒駒(くろこま)の勝蔵(かつぞう)、祐天(ゆうてん)、吉松(きちまつ)、竹居吃安(たけいきつやす)といった有名な賭博師たちは山梨の出身でした。

その中から、ある者は南の富士川を下って、清水次郎長一家に合流し、ある者は東の秩父山脈を越えて、群馬の国定村の国定忠治の下で一家を成したと伝え聞きます。

一獲千金を求めた博徒が多かった一方で、事業を興して、それを成功に導いた者も数多くいました。当時、唯一の輸出

府学問所を設置しました。それが一八八〇年(明治十三年)十月、山梨県中学校となり、一八八二年には(き)典館(てんかん)、一九〇六年からは私が在籍した山梨県立甲府中学になりました。

ここでは、有名な大島正健校長が札幌農学校のクラーク博士から教えられたという「BOYS BE AMBITIOUS!」少年よ、

大志を抱け!の教えが掲げられ、一九二六年当時の江口俊博校長は「日に新たな鐘を製造なさって、私たちに未来への大きな志(夢)と日々変化を求めることの意義を教えてくださいました。

さらに、この学校の伝統行事として、年一回行われる強行遠足がありました。私たちの時代は長野県松本を目指して歩いたのですが、それは、どんなにつらくても苦しくても目的地に向かってただただ二十四時間歩き続けるという初めての経



甲府中学時代の辻氏

品だった生糸を生産し、それを横浜港へ運んで利益を得ていたのは山梨県の生糸業者でした。生糸業の成功を皮切りに物を作る製造業でなく、大衆消費産業である鉄道(地下鉄も含む)、海運、電燈、ガス、金融、百貨店で東京に進出する実業家が続々と現れたのです。

また、歴史的に見ると、甲斐の武田一族の滅亡後、江戸の徳川一族は団結力の強い甲斐一族の勃興を恐れ、甲斐の国には城主を置かず、幕府管轄領として代官所を作り、代官を江戸から派遣することで、この地方を管理しました。

その派遣されて来る代官には、当時、江戸でも遊興好きと言われた旗本が多く、甲府近番に任命されるやご鼠肩の役者、芸人、踊り子、花魁をはじめ、演芸場そのものまでもを甲斐の国に持ち込み、それによって甲斐の花柳界は盛況を呈しました。これは、やがて、甲府から文化人を生むきっかけになりました。

土壌的に恵まれなかったことから奮起して別の活路として実業の道を選び、成功を収める実業家が明治以降、多く表われ、やがて、その集団は甲州財閥と呼ばれて、滋賀県の近江財閥と並び称されるまでに実業界、特に大衆産業で大きな力を発揮するようになります。

そして、その企業家たちは文化や芸能も大切に引き継ぎ、根津美術館、宝塚劇場などの大衆文化の発展に貢献しました。このように、事業と文化を両立させた山梨県民は、寛政年間、甲府城の南に甲



日新鐘と制服姿のキティちゃん

後姿もかわいい!